

Interview

農業資産と文化資産の両方を守る場所

小布施町長 市村良三



私は町長をしていた伯父 市村郁夫に大変可愛がられました。そして、いろいろなことを教わりました。小布施は他の町のように何か資源に恵まれている訳ではないから、自分たちでやるしかない、そのためにはよい建築家が、宮本忠長さんが必要だということを、私が大学生の頃に伯父は話していました。その頃から約40年、小布施はこれだけ注目を集める町になりました。日本が工業立国をめざしていた昭和40年代に、伯父はこの町をあえて農業立町にしようと考えました。この辺りはとてもよいりんごが穫れる、それを軸にまちづくりをしようと考えた。それと同時に、北斎の肉筆画を代表とする江戸末期からつながる文化資産をきちんと守っていきこうとしました。いわば、農業立町のかくし味としての文化立町です。そのベースは、いまでも少しも変わっていません。小布施は観光の町ではなく、農業の町をめざすべきだし、実際にそれを守ってきました。小布施は昔からいわゆる観光地ではなかったし、なろうともしていませんでした。実際に住んでいる人が、よい町にしようという視点でつくっている町です。いまの小布施の一番の産業である栗菓子も、農産物加工業を磨いてきたものです。栗やりんごやぶど

うなど、土地にあったものを六次産業化も視野に入れながら育てる。観光を第一に考えるのではなく、よい農業、よい町づくりを続けた結果、その農作物の購入者として人々が訪れていただくことが小布施の農業を守る確かな道になると思います。この町の人が豊かに暮らすことが外からみえた方に伝わり、それが観光集客にもつながっている。それは他の地域の観光のあり方とはぜんぜん別なものなのではないでしょうか。日々の市井の生活が文化になる、それは一朝一夕にできることではありません。北斎館のスタートも、観光集客ではありませんでした。第一の目的は、北斎が天井絵を描いた祭屋台を永久保存する収蔵庫であること。次に北斎の肉筆画が地域から流出することを防ぐために、住民の意識を上げること、第三に北斎をはじめとする江戸時代の浮世絵の研究の場となること。最後に、運がよければ人が来てくれるかもしれない。この順番がとても大切だということを伯父から直接聞いています。農業を軸にしたしっかりとした産業振興をはかり、町の文化の象徴である北斎館の来春リニューアルが、伯父の気持ちをあらためて形にしてくれるものになることを期待しています。

Interview

新たな方向をめざす北斎館

一般財団法人 北斎館 理事長 唐沢彦三



北斎館は、2015年春の開館をめざして第三期の増築・改修を行うことになりました。最初の建物が竣工したのが1976年、それから何回か増改築はしていますが、久しぶりの大がかりな工事です。最初は補修を中心とした大改築をする計画でしたが、せっかく改築をするのだからいっそのこと企画展示や研究を充実させる、新たな方向をめざしたらどうかと考えました。しかし、文化財クラスのもの賃貸し借りするためには、それなりの施設でないといけません。バックヤードや収蔵庫、防犯などの整備も不可欠です。加えて、浮世絵の研究者もどんどん受け入れたい。全部クリアするとしたら非常に大きなお金がかかりますが、それでもやってみようと思いました。世界中どここの美術館ともやりとりができる、ここが拠点になる。そういう施設にして、浮世絵芸術をこの小布施から世界に広めていこう、そんな夢をみんなで見たんです。宮本忠長さんとの関わりは、私がまだ教育委員会にいた昭和45年前後の頃からです。当時は学校建設の担当をしていて、宮本さんにご縁がありました。栗が丘小学校も一緒につくり

ました。宮本忠長さんが長野に戻って事務所を設立されたのが昭和41年、その直後からの長いおつきあいということになりますね。地方といえども、50年近く一緒に仕事ができるというのは、なかなかないのではないかと思います。今回も、二期から少し時間をおいて、また同じチームで新しくできるということがとても嬉しいですよ。それは、お互いにきちんとつきあってきたからだと思っています。きちんとというのは、お互いを尊重したということ。私も宮本さんの意見を聞いたし、宮本さんも私の気持ちをきちんと聞いてくれました。たとえば、今回の大きな増築で塔をつくってはどうか、という案を私が出しました。頻りにヨーロッパを訪れていると、どこの町にもその町を見晴らす教会の塔があり、それが印象的だったからです。結果的に、いろいろな理由で塔はなくなったのですが、宮本さんはしっかりとした塔のプランも提案のひとつに入れてくれました。信頼関係というのはそういうところから生まれるものです。宮本さんと一緒につくる、新しい北斎館をたくさんの人たちに見てもらおうのが楽しみです。

民間主導によるまちづくり

建築家 古谷誠章



小布施の町では「家の中はそれぞれのものだが、家の外はみんなのもの」といわれる。簡にして要を得た、誰にでもわかる「合い言葉」だ。それが町民1万人の百倍の数の観光客を惹きつける街並みを創り出した。これを生みの親が小布施堂主人と建築家宮本忠長その人である。生粋の民間主導によるまちづくりである。栗と北斎だけの町だったら、ここまで人々が繰り返し訪れる町にはなかっただろう。小布施堂が建てた頃の頃だったからもう20年以上前にここを訪れ、宮本事務所の方に街並み修景の苦労話を伺った。歩道に栗の木れんがを採用する際には、メンテナンスが必要でも足に優しいものをと住民たちと話し合っただけで、自分の靴底に感じるその歩き心地の良さに、とても幸せな気分になったことを覚えている。よもやその頃には、その町に僕自身が図書館を設計させてもらおうとは夢にも思わなかったが、町立図書館のプロポーザルの告知を知ってためらわず応募を決めたのは、そのときの記憶が少なからず影響している。宮本さん自身が審査員を務めていたことにも強く背中を押された。余談だ

が、ご自身の事務所である緑州舎の2階で知人の演奏会が開かれたことがある。量の上でのジャズピアノ、とても奇妙に思える宮本さんのこの懐の広さが魅力だ。そんな人柄に期待したところもある。果たして結果は吉だった。以来、僕にとって町との関わりは格段に深いものとなり、小布施町民との熱心な議論の末に「まちとしょテラソ」が誕生した。それまでの小布施の街並みには一石を投じる建築家だ。しかし、開館後日増しに賑わっていく交流センターとしての新しい図書館の姿を見ると、この石がまんざらの外れでなかったと改めて思う。工事中に初めてこの天井を見上げた市村町長は、しきりと僕の肩をたたいて「これなら良い」と言ってくださった。成熟した風土は、さらなる新しいものの価値を育む広い度量を涵養するものなのだろう。宮本さんが根差す信濃平の風土は、まさにそうして培われて来たのではないだろうか。



まちとしょテラソ

地の塩

建築家 内藤廣



人として敬愛し、建築家としても尊敬できる人はわずかしきいませぬ。宮本先生はわたしにとってそういう数少ない方のひとりです。その先生に小布施を案内していただいたのは二十年近く前のことです。もちろん、それ以前に何度か小布施は訪ねていましたが、先生に案内していただいた小布施は、まったく違うものでした。わたしがいささか緊張していたのはたしかですが、あたかもその緊張を解くように、ひとつひとつの建物を、まるでお孫さんを紹介するように案内していただきました。温かく幸せなひとときでした。たしかに建築はわれわれの生業です。しかし、そこにはそれを遙かに越えた何かがあったのです。建築、建築家、仕事、街造り、街並み、観光、行政。そんなことは先生の中では何の意味もないことのように見えました。そこではもはや、建物は設計する対象ではなく、思考の対象でもなく、生命そのもののように感じられたからです。お孫さんを紹介するように、と感じたのはそれ故でしょう。善悪や好悪を越えた対象との一体化です。そこでは、この世の世俗的な関係性は無になります。

これは、建築家としてのひとつの到達点なのではないかと思えます。自分もいつかはそのようになりたい、と思う一方で、とてもそのようにはなれないとも思いました。あの風景自体が宮本先生の人柄と生き様と一体となった言葉にならない生命なのです。伝統、街並み、風土性、バナキュラー、都会の建築に対する批評的な存在。小布施を頂上上げるとき、いろいろな論じ方があるはずですが、しかし、そうした論は、宮本忠長という存在のごく一部しか切り取ることは出来ないはず。若い頃、事務所を辞して故郷に帰る時に、師である佐藤武夫から、「君は地の塩になれ」と言われた、ということを知ったことがあります。地の塩は穀物にとって不可欠のものですが、目立たず目に見えないものです。地の塩に心があるとしたら、そこに育つ穀物をまるで孫を見るような心持ちで思うでしょう。小布施とは、宮本忠長という塩によって育てられた豊かな穀物なのだと思います。小布施とはそのような場なのではないでしょうか。